

日本人の幸福観——その原型——

伊藤 益

一 序

古来日本人は、サキ、サキハヒ、サチなどの語によつて幸福をいい表わしてきた。サキ、サキハヒは、「咲く」に由来し、サチのチは盪的な能力を示すという語源解釈があるが、その正否は定かではない。しかし、古事記のウミサチ・ヤマサチの神話が端的に示すように、サチが、元来漁獵の獲物もしくは獲物を取る道具を意味していたことはたしかである。そうすると、日本人は、元来、獲物がたくさん獲れて生活が物質的に潤うことを以て幸福ととらえていたことがあきらかになる。

獲物が獲れて最低限の生活基盤が保障されなければ、ひとはけつして幸福にはなれない。古代の日本人は、このことを的確に認識していた。だが、生活が物質的に潤いさえすれば、それだけでひとは幸福を実感できるものだろうか。どのような物質

的栄華も、それを分かち合う者がいなければ虚しいものでしかないのではないか。たしかに、生存の手立てが確立されなくても人間は幸福になれる、と説くのは机上の空論であろう。しかし、生存の手立てが確立されたうえに、さらにそこに加上されるべき何かがあれば、ひとは幸福にはなれない。その加上されるべき「何か」が、原初の日本人にとつてどのような事態を意味していたのか。小稿では、その点を探ることをとおして、日本人の幸福観の原型に迫ってみたい。

二 不幸の典型としての恋

わたしたち現代人は、男女の共歡を幸福の典型と見なし、それを恋という語を以て表現する。若者たちがうたう多くの歌曲を聞くと、恋はすばらしいもの、美しいものとして描かれている。しかし、恋をすばらしいもの、美しいものとする認識は、

実は現代的なものである。恋は、元来、典型的な不幸を意味していた。

「恋」もしくは「恋」に関わる語は、わが国最古の文献記紀歌謡にはわずかに三首中に四例しか姿を見せない。恋の意識は記紀歌謡の段階では、いまだ明確な形をとっていないかつたといわざるをえない。これに対して、萬葉集には「恋」もしくは「恋」に関わる語が約五〇〇例近くを数える。恋の意識は萬葉の時代に明瞭な形で現われたといえよう。

萬葉集には、恋をうたう次のような歌々がある。

旅にしてもの恋しきに鶴が声も

聞こえずありせばか孤悲て死なまし

(巻一、六七 高安大嶋)

明日よりは我は孤悲むな名欲山

岩踏みならし君が越え去なば

(巻九、一七七八)

孤悲死なむ後は何せむ生ける日の

ためこそ妹を見まく欲りすれ

(巻四、五六〇 大伴百代)

ぬばたまの夢にはもとな相見れど

直にあらねば孤悲やまずけり

(巻十七、三九八〇 大伴家持)

六七は、旅に在ってひとり物悲しい気持ちでいるときに鶴の声さえも聞こえなかつたなら恋い焦がれて死んでしまふだろうな、という意。ここでは、家郷の妻(あるいは恋人)と共に在

ることのできない不運が嘆かれている。

一七七八は、明日からは恋い焦がれることになるであろうな、名欲山の岩を踏みならしてあなたが行ってしまわれると、という意。この歌は、「君」との別離が現実問題となる「明日」に恋の起こる時点を見いだしている。すなわち、ここでは、「我」と「君」との共在が保証される今日の時点ではまだ恋は生じないという見かたが示されているといえよう。

五六〇は、恋い焦がれて死んでしまったら何の意味があらうか、生きているこの日のためにこそいとしいあの娘に逢いたいと思うのだ、という意。作者が、「妹」と逢えない情況のなかで「妹」への恋情を吐露していることは自明である。この歌もまた、恋が「我」と「汝」(相手)との共在が保証されない次元で起こるといふ認識をあらわにする。

三九八〇は、夜の夢のなかではしきりに逢っているけれどもじかに逢うことが叶わないので、私の恋心はやむことがない、とうたう。ここでも、「我—汝」関係を築くことのできない、いわば精神の欠落面に恋の原因を求めた考えかたが鮮明に示されている。

以上に列挙した萬葉歌に関しては、恋が「孤悲」と表記されていることに留意しなければならぬ。これは、たとえ「霞」を「丸雪」と表記する類いの、いわゆる「連想的表記法」に基づくもので、恋が「孤」りの「悲」しみととらえられていたことを示す。上述のごとく、萬葉集には「恋」もしくは「恋」に

関わる語は、約五〇〇例程度現われる。そのなかで「孤悲」という表記が三〇例ほどを占める点に留意するなら、萬葉人にとって恋とは、いとしい「汝」から遠ざけられて「我」がひとり孤独をかこつ情態を意味していた可能性があるものと思われる。この可能性は、恋を端的に「恋」と表記する次のような例によつて信憑を増す。

年の恋今夜^{いよ}尽くして明日よりは

常のごとくや我が恋ひ居らむ (巻十、二〇三七)

逢はなくては日長きものを天の川

隔ててまたや我が恋ひ居らむ (巻十、二〇三八)

外目^{まそめ}にも君が姿を見てはこそ

我が恋やまめ命死なずは (巻十二、二八八三)

二〇三七、二〇三八は、卷十所載の七夕歌として対をなすもの。おそらく、二〇三七は牽牛(彦星)の立場から、二〇三八は織女(織姫)の立場から詠まれたものであろう。二〇三七は、一年越しの恋の思いのたけを今夜尽くして、明日からはまたいつものように恋い焦がれることになるのであろうか、という意。二〇三八は、あなたに逢えなくて幾日も幾日もひとり暮らしてきたのに明日からはまた天の川をなかに隔てて恋い焦がれることになるのであろうか、という意である。両首ともに、恋する情態をできれば避けたいものとする認識に立ち、しかも、恋が起こるのを天の川を隔てて互いが逢いえない情況のなかでのこととする。特徴的なのは、二〇三七の冒頭二句「年の恋今夜尽

くして」である。これによれば、天帝の意向のもと一年に一度しか逢えない牽牛・織女二星の恋は、その逢会の場において尽き果てるとされる。萬葉人のあいだには、恋は「我」と「汝」とが逢いえない情況のなかで、「我」ひとりの情緒として生じ、「我」と「汝」が逢会して在る情況は恋を終息させるという認識があつたとしか考えられない。二八八三は、いっそう明瞭にこのことを示す。

二八八三は、よそ目にちらりとでもあなたのお姿を見ることでできれば、私の恋はおさまるであろう、この命がなくならなにかぎりには、という意。これによれば、逢会が叶わぬことによつて引き起こされる恋は、逢会のかすかな可能性が開かれる瞬間に終息する、とされる。作者にとつて、恋は、逢えない場面で生ずるもので、逢いえた際になお継続されるようなものではなかつたといえよう。

以上のように、萬葉人にとつて、恋とは、いとしい相手から遠ざけられて共に在ることのできない情況のなかに生起する情緒であつた。いいかえれば、「我―汝」関係が崩れてある情態が萬葉人の恋であつたといえよう。このような恋が悦楽を意味するとは考えられない。端的にいえば、萬葉人にとつて恋とは悲しみであり苦しみであつた。恋を男女の直接的な睦み合いとして讚美する現代的精神は、恋の本源から乖離するものといわざるをえない。日本人の原初的な精神は、恋を不幸の典型としてとらえた。したがって、日本人の幸福観の原型は、恋とは対

蹠的な境位に求めることができるものと思われる。

三 共在としての存在

萬葉集卷三は、高市黒人の作として、次のような歌を伝えている。

妹も我も一つなれかも三河なる二見の道ゆ別れかねつる

(二七六)

この歌が三河を通過する旅の途次に詠まれたことは明白である。萬葉集はこの歌に「一本」の歌として、

三河なる二見の道ゆ別れなば

我が背も我も一人かも行かむ

を添える。二七六と一本歌とは一組をなす即興歌で、黒人と二見の遊行女婦とのあいだに交わされたものと考えられる。おそらく歌の座は宴席であろう。しかも両首には「二」「三」という数字が配されている。この点から見て、両首ともに座興をめざしたものとおぼしい。行きずりの男女が、酒気を帯びながら、遊び心を知的に示し合ったというのが、両首の内実であろう。そこに深刻な思念を読み取ることは、深読みにすぎるかもしれない。しかし、それにもかかわらず、黒人歌二七六に、人間が在ることそれ自体をめぐる思念が存することは否定できないように思われる。

北山正迪「万葉試論 歌の流れと「存在」の問題」(和泉書院、一九九八年)は、二七六の歌の「一つなれかも」について、こ

う述べている。「まだ明白ではないにしても、いつも心にあった自己の「存在」に関わる何か根本的な情感に気付いたような語感がある」と。北山のいう「存在」に関わる何か根本的な情感」とは、「二」という数的概念によって暗示される、彼我の一体性をめぐる或る情緒にほかならない。「二」は単に数のうえでの一性を示すのではない。それは、むしろ、「妹」と「我」とが一つに溶けこむ融合状態を指し示している。黒人は、その融合状態のなかに「我」が在ることの実感を見だし、それが離別によって動揺することへの怖れを戯れ言めかして述べていると見るべきであろう。この黒人歌を踏まえながら、以下の萬葉歌を読むとき、萬葉人にとっての「在ること」(存在)の具相が、さらにきわだつ。

しましくもひとりありうるものにあれや

島のむろの木離れてあるらむ

(卷十五、三六〇)

この歌は、天平八年拜命の遣新羅使一行が難波津を出航して内海洋上に漕ぎだしたときに、使節団の一員が詠んだ歌である。洋上の離れ小島にぼつねんとたたずむ一本のむろの木。それを眺める作者は、「しましくもひとりありうるものにあれや」という問いを発する。しばしのあいだもひとりで在りうるものであるうかと問うのである。この問いは、むろの木を擬人化しつつ、その孤立した在りように疑念を投ずるものにほかならない。作者の認識によれば、どのような存在者も単一に存在すること

はできない。何ものであれ、生きて在るものは他者と共に在らねばならない。ところが、かなたのむろの木はひとりです立っている。作者はいう。あの独在は奇怪な事態なのだ、と。

ここには、誰かと共に在ること、すなわち共在こそが人間の在ること(存在)なのだという認識が鮮明に打ち出されている。作者は、自己にとって代置不可能な「汝」(おそらくは妻)から引き離された旅の途次にあり、しかもこのことが彼に悲愁をもたらしている。この点を勘案するならば、作者の考える共に在るべき誰かとは、「汝」にほかならなかつたといえよう。つまり、作者は、「我―汝」関係の確定によってこそ、「我」の存在が確立されると考えている。

萬葉人にとって、恋とは「我―汝」関係が不確定なものとなる情態を意味していた。「我―汝」関係が存在の確立を意味するとすれば、恋とは「我」の存在がぐらぐらと揺れることにはほかならなかつたといえよう。萬葉人は、こうした動揺、すなわち「存在のゆらぎ」に不幸を見た。とするならば、彼らにとつての幸福とは「我―汝」関係がしっかりと定立していることを意味していたものと考えられる。以下に掲げる歌は、このことを明瞭に指し示している。

四 結

さきはひのいかなる人か黒髪の人

白くなるまで妹が声を聞く

(巻七、一四一一)

一首は、萬葉集卷七所載の挽歌である。黒髪が白くなつてしまふ歳まで妻の声を聞くことのできる人は何と恵まれた人なのであろう、という意。ここには、物質的な豊かさが保障されればそれだけで人間は幸福であるという認識を峻拒する考えかたが認められる。一首は、物質的な繁栄とは別種の精神的な何かを幸福の因として求める志向性を如実に反映するものと見てよいであろう。しかも、その「何か」が原初の人々たる萬葉人にとって具体的にいかなるものであつたかを、一首は作者の不運を訴える否定態のなかで鮮明に示している。すなわち、この歌の作者にとって、幸福をもたらす直接の因子は、他の何ものにも置き換えることのできない「汝」(妻)との共在が命のかぎり保証されることにほかならなかつた。

「我」が「汝」と共にあること、すなわち共在を物質的な繁栄にまさる幸福と見る認識は、次の萬葉歌のなかにも明瞭に示されている。

次嶺経 山背道を 人夫の 馬より行くに 己夫し 徒歩

より行けば 見るごとに 音のみし泣かゆ そこ思ふに

心し痛し たらちねの 母が形見と 我が持てる まそみ

鏡に蟬蛸領巾 負ひ並め持ちて 馬買へわが背

(卷十三、三三二四)

反歌

泉川渡り瀬深み我が背子が旅行き衣ひづちなむかも

(同右、三三二五)

或本の反歌に曰はく

まそ鏡持てれど我は駿なし君が徒歩よりなづみ行く見れば

(同右、三三一六)

馬買はば妹徒歩ならむよしゑやし

石は踏むとも我はふたり行かむ

(同右、三三一七)

右の四首

卷十三「問答」の部に収められたこの一群の歌は、三三一四

～三三一六が妻の作で、三三一七が夫の作である。この問答において、妻はまず、他家の夫たちが馬に乗って易々と山背道を越えて行くのに、自分の夫は同じ道を徒歩によって難渋しながら越えて行く、と語る。妻はいう。歩いて行くあなたの後姿を見ていると、心が痛み涙が流れて仕方がない、だから、あなた、私がお母さんの形見の品として大切にしているまそみ鏡と蜻蛉

領巾を持つていって、それらを代金に添えて馬を買ってください、と(三三一四)。妻はさらに、泉川の渡り瀬が深いので、あなたの着物が濡れてしまうのではないかと案じ(三三一五)、あなたが難渋しながら歩いて行かれるのを見ていると、形見の品など持つていても詮ないことだ、と語る(三三一六)。ここで注目すべきは、妻が母の形見という何ものにも換えがたい財を抛つてまで、夫に尽くそうとしている点である。妻は、峨々たる山脈をひとり越えて行かなければならない夫の苦衷を、自分自身の悲しみとする、いわば「共悲」(この概念については、拙著「日本人の愛―悲憫の思想―」北樹出版、一九九六年等參

照)の境地に立って、自己犠牲を貫こうとしている。

こうした妻の訴えかけに対して、夫はこう応える。馬を買えば、お前が歩かなければならないだろう、ええい構うものか、たとえ川瀬の石を踏もうとも二人で歩いて行こう(三三一七)と。夫は、妻の共悲を真つすぐに受けとめながら、夫の身を切に案ずる妻のまごころに共悲の情を与え返している。妻を犠牲にするよりも、むしろ二人して貧しさゆえの不如意を耐えてゆこうというのが、この場合の夫の考えかたである。それは、物質的な豊かさとは異質な次元に、すなわち、相互に相手の心身を氣遣い合いながら「共に在る」という精神の位相に幸福を見いだそうという志向をあらわに示すものであった。

以上のように、古代の日本人は、物質的な繁栄を求めつつも、さらにそれを超えて、「我」と「汝」とが共に在ることのうちに幸福を見いだしていた。物質的な次元で最低限の生活が保障されなければ、人間はどうてい幸せにはなれない。飢餓に喘ぐ生きざまのどこに幸福があらうか。しかし、生活が保障されさえすれば、それだけで幸福であるとは、古代の日本人は考えなかった。「我―汝」関係の確立、ひいては「我」の「在ること」の確定に幸福を見いだすことこそが、日本人の幸福観の原型をなすものであり、しかも、この原型は今日もなおわたしたち日本人の心の奥底に息づいているといえるのではないか。

※小稿は、比較思想学会第三七回大会のシンポジウムに際し

て、会員諸氏に配布したレジュメに加筆・修正を施したものである。各提題者の所見や会場からの質問を考慮したうえで、加筆・修正ではあるが、それらの所見や質問を十分にとらえ切っているとはいえない。不備はあげて著者の無力に由来する。読者諸氏にはその点について、ご寛恕を賜りたい。

(いとう・すすむ、倫理学・日本思想、

筑波大学大学院教授)